

研究開発課題中間評価結果

事業名（年度）	ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業 （令和4年度～令和8年度）
研究開発課題名	ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点群 長崎シナ ジーキャンパス（出島特区）
代表機関名（所属 役職）	国立大学法人 長崎大学（感染症研究出島特区・教授、特区長）
研究開発代表者名	森田 公一

【総合評価】 良い

【評価コメント】

本拠点は、拠点長を中心に9つの研究開発チームが結束して、部局横断的な全学一体となった運用がなされており、全体として着実に進捗している。拠点を構成する研究者については、本事業の「アンダーワンルーフでの拠点形成」との趣旨に照らして精査を行い、事業が目指す拠点形成を進めてほしい。

企業との連携によるAI を用いた迅速かつ網羅的なエピソード同定は、他の拠点にはないユニークな取組である。

ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（LSHTM）との連携による疫学研究の体制が整備されている点も本拠点の大きな特徴である。LSHTMとの連携の仕方を十分に考え、ワクチン開発のための疫学研究に注力して進めてほしい。

拠点と連携している企業が3社に留まっているため、連携する企業数を1社でも増やし、産学連携の具体的な事例の増加、研究成果としての特許数の増加に努め、最終的には外部資金の獲得の増加につなげてほしい。また、そのための体制強化も必要である。

BSL-4施設の安定稼働・本格運用は、本拠点の大きな役割である。早期稼働に向けた継続的な準備を進めるとともに、稼働後の活用方法の事前検討を進め、本事業において早期にBSL-4施設が有効活用されることを期待する。

本事業は感染症有事を見据えた迅速なワクチン開発に資することが目的であり、各拠点で研究開発を進めているワクチンシーズについては、最終的な実装化を意識したタイムラインを設定し、迅速に開発が進むように拠点内で優先順位を明確にして戦略的かつ効率的な研究開発マネジメントを行うことが求められる。

基礎研究に留まらず、ワクチン開発を成功させ、上市されることを視野に入れて本事業を推進してほしい。また、「新規のワクチンを国内で短期間に実装するという最終目標に基礎研究の側面からどのように関わるか」というゴールを見失わないように拠点運営を進めてほしい。

以上